

南方（フィリピン）

旭兵団を想う私の戦後

秋田県 辻原 猪一郎

私は大正十二年七月八日、秋田県大曲町の中心を流れる丸子河畔で生まれました。私の軍隊の体験は『平和の礎』第六巻に、「旭兵団満州国境よりルソン島での死闘」を書きましたが、今回は後方（衛生隊）より顧みたまわらない旭兵団について、戦後五十余年の今日、私の復員後と共に書いてみたいと思います。

旭兵団（第二十三師団）は昭和十四年のノモンハン事件で難戦苦闘しました。その後兵団の再建にとりか

かり、兵員、装備、訓練の充実強化につとめました。熊本（歩兵第六十四連隊）、鹿兒島（歩兵第七十一連隊）、都城（歩兵第七十二連隊）の九州健児による強兵編成の在満（ハイラル）部隊であり、対ソ戦略部隊として鍛えられた精鋭兵団でありました。

しかし昭和十九年十二月の臨時編成時に、野砲兵第十七連隊は機械化砲兵の兵備が輓馬砲兵隊に格下げされ、機能しなくなり、兵団としては不満でありました。こうした優良兵団も渡比に際しては一部をハイラルに残置したり、海没したりして、兵団全体として約半数近い損害を被ったのでした。実際的には戦時編成の一個師団として具備しているものではありませんでした。

旭兵団も、満州で動員発令（昭和十九年十二月十九日付）が遅れ、実に敵進攻の三週間前に当たり、作戦

的にはかろうじて間に合う状況であったとされてい
ました。そして約一カ月の期間内に雪の北滿からきた將
兵にとっては冷房室から極暑の露天に出されたような
氣候の温度差に苦しみ、参りました。

そして米軍がリンガエン湾岸地区に上陸するわずか
前の昭和十九年十二月二十日、三十日ごろに主力部隊
は同地を確保し、敵の破碎につとめるための配備につ
いたのであります。一方、残りの後方部隊や海没生き
残り部隊は昭和二十年一月から、私の衛生隊は一月七
日ごろに湾岸地区のシーズンに配備についたばかりで
した。いかに切迫した状況下とは言え、二日から二十
日ぐらいの期日で充分な陣地構築、その他の戦備配置
をすることなく、戦場に投げ出されては、十分に戦力
を発揮することはできませんでした。旭兵団は敵米軍
のリンガエン湾岸に上陸以来、いつも矢面に立って、
ルソン作戦の中軸兵団として、一番大事な任務を受け
持って、激戦に激闘を続けました。

また、海没により兵器、弾薬、糧秣を失い、その補
充もできないままに、戦闘に突入してしまいましたの

で、ことに食糧の欠乏には困ったものです。火炮も持
たず、食糧も欠乏してマッチ箱一つ程度の支給米で過
ごしてきた兵団でありました。

兵士は衰弱しており、その多くは傷病し、それを苦
にしたり、戦況不利なるわが軍の前途を悲観したり、
気の弱い者の中には自殺する者が出るなど、早まった
行動だけに残念でなりませんでした。

石にかじりついても生き抜こうとする気丈な精神力
と、食糧不足を克服するのには何でも食べてやろうと
する意欲（食欲）の持ち主でない生きていけないと
思いました。いずれにしても將兵の苦難は言語に絶す
るものでありました。

米軍がリンガエン湾岸を埋めつくした水陸両用車は
約十四輛、上陸用舟艇は約二十四輛を越えた敵兵力に
対して、わが水、陸、空にわたる特攻攻撃が敢行され
るも大勢を制することができず、緒戦で勝敗が決した
ような戦況でした。それは何分にも膨大な物量を誇り、
科学兵器を持つ敵米軍をいかに必死に攻撃しても戦線
の保持は困難であったようです。

各部隊の将兵が日本の最後の勝利を祈念しつつ、数倍の兵力、数十倍の火器、火力、完全制空権を握られた空軍を相手に戦い抜いた強い精神力とそれに応えた尊い犠牲者に対し、今一度回想してみる必要があると考えます。

まず北部ルソンは山岳地帯で、北流する比島第一のカガヤン河の河谷地帯は米の産地であることを踏んでの作戦準備をしました。この周辺のプログ山地が最終抵抗陣地となりましたが、ここで食糧の自給自足ができると思い込んで作戦を立てたのが間違いで失敗どころのようでした。ここでも調査ミスによる作戦の失敗がありました。

撤退につぐ撤退でプログ山の周辺では密林（ジャングル）が多くなって各部隊間の連絡が途絶えてしまい、その後終戦まで、お互いの消息が不明でありました。そして食糧もますます窮乏し、患者は続発し、将兵の苦難はとて言葉では表しようがありませんでした。

やがて、ぼつぼつ逃亡する兵士が始めました。それらの兵達が密林や谷間にかくれているうちにアメーバ赤痢やマラリア、そして飢えのため死んだ姿を何度も転進（撤退）の途中見ました。

戦友の足手まといになると苦慮し、自分の銃で自殺した負傷兵もいましたし、負傷しても手当てもされず、元気な者も食糧がなくてつぎつぎと倒れ、いったん倒れたら立ち上がれず、死を待つばかりの者もおりました。また白衣の天使も骸骨の姿になり、祖国のためとは言え、あまりにも哀れな最期でありました。

リンガエン湾岸の戦闘では、当初の米軍兵士の配備は、第一線部隊には黒人兵と一部比島兵の混成部隊を、そして後方（第二線）に米国人兵（正規軍）を配備していることもありました。

後方部隊である衛生隊から観る第一線（前線）の戦況等は、間接的観測として担架兵の前線での負傷者收容時の状況などから、また撤退して来た負傷兵等から聴取して戦況の概略を知りました。

そして米機動部隊が活動不可能なため、山岳地帯に

は米正規軍はほとんど進出しませんでした。

そこでは地勢、土地事情に明るい比島ゲリラ兵、黒人兵が活動し、ことに比島ゲリラの温床地帯である山岳州（マウンテン州）では、正規軍以上に秀れたところがあり、活躍して、わが兵団将兵は、常にこれらのゲリラに妨害されたり、脅かされながら、また兵団の側面及び時として後方から攻撃を受け、一方では前面の米軍正規軍と戦闘せざるを得ず、将兵のその苦勞は想像以上のものであった、と聞いております。

そこで任務の關係上、どうしても兵力を分散、配置するので、部隊が別れ別れになるという状態で戦闘する場合が多かったようです。前面の敵のみという今までの戦闘の常識を覆す特筆すべきことであつたのです。わが軍は敵米軍のみならず、各地の抗日ゲリラに苦しめられました。徹底抗戦を選んだ日本軍はルソン島の山岳地方をはじめ各地の山中に閉じこもりましたが、武器は勿論のこと、食糧その他の物資欠乏で悩みました。それだけ現地徴発をしたために、地元住民に対する暴挙な仕打ちが多かつたと思ひます。

大変に氣の毒に感じているのは、日本軍に従つて協力して戦い、山中に逃れた在留邦人や現地住民にも多くの犠牲者が出たことです。

なお、終戦後も部隊から離散した日本兵士の中には、山中に隠れて、すぐには米軍に投降しなかつたものも少なくない模様でした。

別れ別れの部隊間の連絡は、通信隊が地形または敵の妨害のため、なかなか連絡がとれなかつたり、部隊兵士が行方不明になるなど、転進先不明のまま行動するので、間違つて米軍陣地内に入り込むこともままあつたと聞いております。

そのうえ兵器はなく装備が悪く、とくに土木作業用の器具機材がなかつたので、壕を掘る場合とか、河に橋を架ける木材を切り倒すのに、現地比島住民の使つてゐる鋸刀のようなものを使用して、準備、調達するよりほかにしようがなかつたようであります。とくに山岳地帯では、あらゆる場面と遭遇し困難を極めたようであります。また食糧不足はこの部隊も同じことであつたので、現地調達するのは、ことに山岳地帯で

は無理であったと思います。

そのうえ、全軍に指示された赤痢予防対策としての生水飲料の禁止。マラリア予防対策などの医薬品の備蓄保存もなく、負傷者及び疾病患者を救済できず、戦死者より病死者の割合が多い、悲しい事実が証明されました。だがよくもこれらの艱難辛苦に耐えて、終戦まで戦い抜いたと感無量なものがあります。しかし部隊によっては八〇パーセント以上の尊い人命を失ったことを忘れてはいけないと思います。

よくぞ生き残れた私は、約二年二カ月の收容所生活を米軍病院入院で余儀なくされ、昭和二十二年十月、本土（大村湾）に復員しました。

故郷への帰途、東京までの各駅停車の普通列車には、いっぱいの人々がリュックサックやら非常袋、買出し袋を持ち、車中は立錐の余地もないほどでした。

九州の主要な都市八幡、戸畑、小倉など各地の破壊された様子にはビックリし、一面の焼け野原と化した様に、改めて敗戦の憂き目を感じました。

中園地方、関西、中京（名古屋）、東京とどこも甚大な空爆の被害を受けており、目を覆うものでありません。東京駅から電車で上野駅下車、復員兵は隊列を組んで上野公園内寛永寺に一泊宿泊し、翌日各地区ごとに分散し帰郷しました。

私は奥羽線にて故郷へ。大曲駅には爆撃された跡もなく、故郷の良さと有難さを感謝し実感しました。奥羽線の途中の各地では空爆された跡もなく、相変わらずの農村風景を目の当たりにし、日本の良さを噛みめました。

郷里大曲駅に到着した時刻は午後三時ごろだったと記憶しております。大曲駅より伯母の家に立ち寄りました。実は比島收容所で何回も夢枕に立たれ、元気で早く帰るんだよ、健康には十分に気をつけるのだよと言われたのが気にかかっており、立ち寄ったら他界しており、仏前にて拝み、帰宅の報告をして自宅に帰りました。両親、弟妹家族一同元気でおり、帰宅を喜んで迎えてくれました。

私が現役入隊した昭和十九年三月ごろも、戦争協力

のため物資不足の折にて、物資統制令による諸物資の配給制で諸物資の自由販売品はなく、帰宅当時、私宅の生業（家業）の呉服・衣料販売及び染工業も自由販売物品はなく、店内では家具、飯台、テーブル等を県内木工業者のご厚意にて販売致しておりました。

衣料品、染物に関する物資も父が各種統制組合の陣頭に立ち、各業者への物資の円滑なる配給に尽力していた関係で、染物工場の染料の藍やその他の資材も少ないながら支給され、細々ながら仕事をしておりました。

食生活は米産地とはいえ配給制でありましたが、当地区はお得意様の大半である農家の方々の援助により、頂いた米や野菜などで不足がちながらもまあまああの生活にて暮らしておりました。

長男である私は戦中の余病（マラリア、肋骨打撲傷）並びに栄養失調にて体力が衰えているので、両親は自分の間は休養をとるよう配慮してくれましたが、営業物資の不足な当時、遊んではおられないので、一生懸命に家業に精を出して父に協力し、働きました。父は

相変わらず自店の家業や仕事は母に任せ、町の仕事、公務（町会議員）に寧日のない有様でしたので、私は家業に努力しない訳にはいきません、体力にあわせながら頑張りました。

父は私の入隊後、当時の軍需省の要請により、木造船用の船釘や船用鉄工品の工場を作り、また同じく軍需用のタオル製品工場も建設し、大勢の人々を使用しておりました。父は当地の行政機関その他の要請あれば、当町民等の人々と共にいろいろな仕事をしており、他人（公人）のため仕事を何でも引き受けてやっておりました。反面家業の方は母任せでしたので、私は手伝いというよりも中心になって働かないとどうにもなりませんでした。

諸物資の少ない戦後時代は、戦中の留守時代の家業を取り戻すべく頑張るより他ありませんでした。

私の生業は物資不足による問題と、戦後の諸問題、農地改革、金融紙幣の交換改革、その他により一時資金的に困ることがありましたが、家族全員及び使用人等の一同の協力により、どうにか乗り切ってここまで

やってこられました。

日米決戦の天王山といわれた比島決戦も、もうすぐ二十一世紀となる今日、遠い遠い昔の出来事になりつつあります。しかし、七十余歳を迎える老兵は、今こそ我々が戦争体験した事実を書き記さなければ……と思うのであります。

あの南国の酷暑に耐え、飢餓と過労と孤独と恐怖のなかに辛勞し、悩み、苦しみと戦いました。戦争の悲惨さと空しさは、戦場で体験した者ほど痛切に感じると思います。

終戦の報せを聞いた時には、比島北部ルソンの山岳奥地戦線で、余命幾許もなく、祖国へ無事に生還できるだろうか……到底生きて帰れぬと思い、日夜北の空を眺めては祈り、考えておりました。

その後無事祖国に還り、戦後しばらくは戦争を語ることはばかられました。自分だけが生きて還ったことが亡き戦友に申し訳なく、自責の念に駆られていたからであります。

また何故あのかの、あの瞬間に、もっと強く手を

差し延べて助け合わなかったかと、戦中のシーンを思い浮かべながら、心の中で手を合わせて冥福を祈っております。

そのころは、戦況は厳しく、一刻を争う命令伝達という任務に忠実であつたばかりに、時間を浪費してはと思い、命令伝達は何よりも優先されるという使命と、個人の生命、救命（救助）との間で、悩み苦しんだこともありました。

私は旭兵団（第二十三師団）衛生隊（第二一八八部隊）のハイラルでの創設から終末まで在籍した一員として、この間の戦争の体験と見聞した事柄をまとめ、「北部ルソンの戦場」で共に戦い、不幸にして戦没した戦友の御霊（英霊）に捧げる一念で書き記しました。もうあれからはや五十余年の長い歳月が流れ、この間にも多くの僚友たちと幽明境を異にしました。時は流れ、逝く人、病む人、私も老境に至っております。このときこそ、苦難に耐えた貴重な体験を、また、その時に、どのように行動したかを詳述して記さなければならぬと思います。

資料の大半を戦中に比島軍抗日ゲリラの襲撃を受けた際に紛失した経緯もあり、正確さに欠ける点があると思われませんが、無事に米軍の没収を避けて持ち帰った資料の一部をもとにできるだけの整合に努めました。

当時の私共には、戦況は勿論のこと、いかなる作戦によるものの行動か、完全に知る由もありませんが、命令伝達者として、おぼろげながら、戦況の概略を判断することができました。

わが衛生隊は創設在隊者数七三四人中、五八四人の尊い戦友を失いました。後方援護部隊とはいえ、このような結末になろうとは夢にも思っておりませんでした。

これは比島北部ルソン戦線の激戦を物語るものだと思います。このことを後世の人々に知っていたいただき、戦争は厳しく、烈しくそして惨酷で、空しさ、平和の尊さを伝えることが生還者の務めだと思っております。

そして戦争による悲劇を再び繰り返さないためにも、また日本再興の礎として、散華した多くの同士（戦友）

の御霊を弔い、お慰め申しあげるとともに、わが国の永遠なる平和への悲願をこめて、その繁栄を祈るものであります。

【解説】

体験記執筆者の辻原猪一郎氏の所属した第二十三師団（旭）は、昭和十四年、ノモンハン事件に於ける主力部隊として勇戦するも、兵力、装備の優勢なソ連軍に対し衆寡敵せず、多数の犠牲を出した悲劇の師団として知られているが、昭和十六年七月十六日、臨時動員時の師団長は及川源七中將であった。また辻原氏の所属した師団衛生隊長は志波常一中佐である。

北満・海拉爾ハルビンにおいて第六軍隷下、北の守りの重点地域において常に訓練に精励していたのであるが、昭和十九年、比島戦線に急遽派遣、第十四方面軍隷下となる。当時満州からは、第十師団（鉄）、第十九師団（杉）等と共にルソンに上陸したが、途中一部は海没し、兵員、兵器、弾薬、糧秣、衛生材料等の多くを失い、米軍上陸（レイテは既に米軍の手中にあり）、ル

ソン山中で終戦にいたるまで激闘を重ねたのである。

比島・ネグロス島

私の戦争体験記

兵庫県 前川 保

昭和十六年十二月八日、日本軍が米國ハワイ真珠湾攻撃をした翌年の昭和十七年九月一日、現役の航空技術兵で入隊を命ぜられました。この喜びは特別で、関東軍航空技術兵として勇氣百倍の思いで門司港に集合して輸送船に乗船し、目的地の釜山港に無事上陸ができました。

私たちは朝鮮平壤教育隊に入隊を命ぜられました。それから六カ月間は一般教育で、内務班の訓練など毎日が初年兵ばかりです。同年兵同士は何事をするにも、すべて競争的な生活で、他人より遅れをとらない、常に切磋琢磨して共に励むことが本願でありました。とくに私たちは北滿で鍛えた寒風にも負けない訓練を受

けた体験から、酷寒零下二〇度から三〇度という激しい気温のなか、日夜を欠かさず特別勤務に服しました。特別勤務としては衛兵の動哨勤務に服することの喜びでありました。特に真夜中、午前一時から午前二時の満月の晩など、全く内地では気にもしない時間ですが、この時間、北滿では頭上に光輝く北斗七星があり、これこそ昔から諺にもある尊い星座で、宇宙の天体における羅針盤として洋上の航海には必要とされます。これが私たちの頭上に光り輝いていた星でした。

それから間もなく関東軍航空本部より動員令が下りました。昭和十九年四月ごろ、航空隊第一独立警備隊の蘭崗に集結するようという発令であります。中隊長以下百十七人は直ちに編成されて、特に技術隊の諸兵器および物資を積み込みました。四月中旬ごろで、その日は猛吹雪でしたが、桜の花も咲き誇り、気温的にも変化の激しい季節でした。

それから間もなく南方派遣部隊として移動命令が発令されました。私たち南方第一独立警備隊でも先発隊の出陣式が迫り、完全軍装を整え勇躍征途に就くこと